

# 人間ペスタロッチーについての考察Ⅱ

## —イヴェルドン学園の解散—

福田 博子

Thoughts of J.H.Pestalozzi as a Man II  
—Dissolution of Yverdon School—

FUKUDA, Hiroko

キーワード：メトーデのメッカ、管理無能力、不公平、人間教育、愛情

### はじめに

かつて「人間ペスタロッチーについての一考察」というテーマで小論を執筆した<sup>1)</sup>。それはペスタロッチーの生誕250年を記念して彼の人間性について考察したものであった。即ち、ペスタロッチーの子ども時代の逸話や、彼に特に影響を与えた人々、彼自身の自己評価、同僚達の評価、さらに我が国の教科書に掲載されたペスタロッチー像について述べたものである。

本稿は1986年11月17日ドイツ教育研究会（於国立教育研究所）で発表した「ブルクドルフのペスタロッチー」を基に加筆修正したものである。ペスタロッチーがブルクドルフ時代に教授法で功を奏し、イヴェルドン<sup>2)</sup>時代には世界の初等教育の総本山の観を呈したのである。しかし、学園の校長ペスタロッチーの力量不足と同僚の対立の激化、本来の人間教育が歪曲・変質されたこと等により、学園は崩壊の途を辿ることになった。ブルクドルフ時代、イヴェルドン時代の様相と死に至るまでのペスタロッチーの苦悩を明らかにしたい。

### 1 ブルクドルフ時代 (1800～1803)・イヴェルドン時代 (1804～1825)

文部大臣シュタッパー (P. A. Stapfer, 1766～1840) はペスタロッチーをブルクドルフの下町の小学校の教師に推薦してくれた。この学校でも、キリスト教教義入門書、問答書、詩篇が教材で、これを暗誦させたのである。しかし、ペスタロッチーは全く違った方法で授業をしたのである。即ち、子ども達に課題も与えず、暗誦もさせなかった。こういうやり方を、校長も親達も理解できず、ペスタロッチーはこの学校を辞任した。

そこで今度は、女性校長の公立学校に移動した。ここでペスタロッチーはユニークな授業を展開する。教材は子どもの能力に応じて作成されるべきで、子どもが出来ることを与えなかったり、出来ないことを与えることによって、子どもを苦しめたり、混乱させたりしてはいけない。これがペスタロッチーのいう授業の心理化である。

この学校に8ヶ月勤めた時、ブルクドルフの学校委員会は調査をした上で、ペスタロッチーの教授の成果に讃辞を呈した。そしてこれを機会に、ペスタロッチーはさらに程度の高い男子小学校に移り、8歳から12歳までの約60人の子ども達を一人で教えるという新しい仕事に専念することになった。

文部大臣シュタッパーの秘書フィッシャー (J. R. Fischer, 1772～1800) がアッペンツェル州から、貧しい家庭の子ども達を裕福なブルクドルフの家庭に引き受けさせる試みを始めた。ところが、フィッ

シャーが急死したので、ペスタロッターがこれらの子ども達の面倒を見なければならなくなった。そしてブルクドルフの古城を利用することが許された。

学園が軌道に乗ったので、1800年6月シュタッパーは「教育友の会」という会を作り、会員から委員を選び、ペスタロッターの教育を調査研究して報告することを依頼した。シュタッパーはこの会を組織してまもなく大臣の職を辞任したので、その後任にモール (F. Moor) という思想家がなった。1800年10月1日、教育友の会は大臣の下に集まって懸案の報告を行なった。

この頃ペスタロッターが執筆した作品『メトデー』(Die Methode, 1800)、『ゲルトルート子ども教育法』(Wie Gertrud ihre Kinder lehrt, 1801) は反響が大きかった。

1802年ベルン教育局長イト (J. S. Ith, 1747~1813)<sup>3)</sup>らによってブルクドルフ学園の査察が行なわれたが、イトの報告は好意的で、ペスタロッターのメトデーを高く評価した。こうしてペスタロッターの名前と教授法は広くヨーロッパに知られるところとなり、学園はメトデーのメッカとして、国の内外から多くの見学者が集まった。

学園は1803年全盛期を迎えたが、ヘルヴェチア共和国が政変によって崩壊し、ベルン州の管轄下に入った。したがって、ブルクドルフ城は地方長官の官舎として使用するため、学園は城から撤退することになった。その代償としてブルクドルフの西近郊にあるミュンヘンブーフゼー (Muenhenbuchsee) の聖ヨハネ騎士修道院が提供され、ここに移転した。1804年7月、学園の経済管理をフェレンベルク (P. E. von Fellenberg, 1771~1848) に譲渡した。この頃学園は6学級、生徒数67人。8月下旬少数の児童でイヴェルドンに学園を開く。1805年7月ミュンヘンブーフゼーの学園はイヴェルドンの学園に合併した。1807年から1812年に至る間の最初の2カ年間は開花期であった。

ここで、一人の生徒の証言を紹介しよう。

「私は大体1808年の7月7歳半で入学したが、僅か9カ月滞在しただけであった。それは学校の最も輝かしい時期で、生徒数は137人に達していた。ただにスイス人とドイツ人とフランス人とだけではなく、イタリア人もイスパニア人もロシア人も、更にはアメリカ人までもいた。(中略) 生き生きとした喜ばしい眼をしているこの親切な老人 (ペスタロッター) が、私は今でも眼に浮ぶ。彼の唇に現われている親切さには誰でも彼に引きつけられるのを感じた。男も女も子どもも喜んで愛に満ちた彼の抱擁を受けた。この卓越した人を賞讃するためなお私の言わねばならないことは、彼が私に学問は義務感情から為すべきものであって、賞讃や報酬等という危険な手段によって為すべきものでないと教えてくれたことであった。(中略) 子どもの時この非凡な人と生活を共にしただけではあるが、彼は忘れ得ぬ記憶を私の心に残している。そして彼こそ私の年少時の恩人だと思う。」<sup>4)</sup>

1818年9月クランディに貧民学校を開設した。貧民の子ども達が将来、貧しい子ども達の教師となるための学校であった。それと並行してノイホーフに農業を基本とする働きながら学ぶ貧民の子ども達の学校を設立するつもりであった。しかし、1819年秋クランディの貧民学校はイヴェルドン学園に合併された。

1824年、ペスタロッターはすべての事業が挫折したことを認める『声明』を發し、1825年3月学園を解散してノイホーフに引きあげた。

## 2 学園の教師・協力者・訪問者<sup>5)</sup>

### (1) 学園の主な教師あるいは協力者

#### 1) クリュージー (H. Kruesi, 1775~1844)

飢餓に苦しむアッペンツェル州の子ども達に付き添ってブルクドルフへやって来た。ペスタロッターの最初の協力者で、1800年ブルクドルフの学校開設以来、教師を務め、イヴェルドン

学園を1816年に退去した。後にトローゲンの州立学校長、ガイスの師範学校長となった。

2) トブラー (J. G. Tobler, 1769~1843)

トローゲン出身。バーゼルで家庭教師をしながら神学を勉強中、ペスタロッチーのメトデーに共感し、1800年ペスタロッチーの協力者となる。イヴェルドンでは短期間、唱歌と博物の教師だった。夫人も学園の協力者であった。1801年4月バーゼルで学校を設立し、その後教師として多くの場所で活躍。

3) ブース (J. C. Buss, 1776~1855)

チュービンゲン出身。『リーンハルトとゲルトルート』を読んで感銘を受けた彼は、トブラーの紹介でブルクドルフを訪ねた。1800年から教師として、図画と音楽、幾何を担当した。また、それらのメトデーを研究した。1804年からイヴェルドン学園でも授業を担当したが、1805年去った。

4) ムラルト (J. von Muralt, 1780~1850)

チューリヒ出身。1802年からフランス語の研究のためパリに行き、丁度その頃パリに来ていたペスタロッチーと会い、ブルクドルフ学園の教師になるよう懇願された。1803年5月ブルクドルフ学園の教師となって、宗教教育の一部とフランス語を担当した。学園がミュンヘンブーフゼーとイヴェルドンとに分かれた際には、主任教師としてトブラーとともにミュンヘンブーフゼー学園を担当した。

5) ニーデラー (J. Niederer, 1779~1843)

スイスのアッペンツェル州出身。トブラーの友人であった。牧師で、若くして教育改革の志を抱き、1800年ブルクドルフにペスタロッチーを訪ねた。彼はシェリングの哲学に傾倒し、ペスタロッチーの教育思想の哲学的基礎づけを自らの使命と考えた。イヴェルドンではペスタロッチーの多くの論稿を公刊したが、哲学的介入をすることもしばしばであった。ペスタロッチーへの諸批判に対して痛烈な反論を与え、多くの批判者と共に協働者の内にも反感を呼んだ。シュミットとの対立は激しく17年学園を去った。

6) シュミット (J. Schmid, 1786~1850)

オーストリアのチロル地方出身で、ブルクドルフの学園の生徒であった。その数理的な才能によって教師となり、ペスタロッチーの助手として活躍した。イヴェルドンの学園を担った教師の一人。ニーデラーとの対立は学園の教師の分裂を招き、1800年学園を退去した。15年に復帰したが、彼に反対する多くの教師の退去は、学園の解散を余儀なくした。

7) ラムザウアー (J. Ramsauer, 1790~1848)

アッペンツェルの生まれ。4歳の時父を亡くし、1800年ブルクドルフに送られる。ここで学び、1804年7月から助手を兼任。優れた教師となり、イヴェルドン学園の黄金時代を支えた。1816年4月シュミットの強い管理体制を不服として去る。後にオルデンプルクの宮廷で王子、王女の家庭教師となる。

8) グリーヴズ (J. P. Greaves, 1777~1842)

イギリスの商人であったが、ナポレオンの大陸封鎖令により、財を失う。その後、アイルランドのペスタロッチー信奉者シング (J. H. Syng, 1788~1845) の書物を読み、ペスタロッチーを知った。そして1817年イヴェルドンに赴く。翌年ペスタロッチーが近郊の克蘭ディに開設した貧民学校で、英語を教えた。その閉鎖後、再びイヴェルドンに移り、イギリスからの留学生の指導等に当たった。1822年イヴェルドンを去り、帰国。その後イギリスにおけるペスタロッチー運動の有力な指導者となる。ペスタロッチーの『幼児教育の書簡』(Letters on Early Education, addressed to J. P. Greaves, ESQ) はこのグリーヴズに宛てたものである。

9) ミーク (J. E. Mieg, 1770~1842)

フランクフルト出身。ペスタロッチーに関心を寄せる銀行家ヴィレマーの息子アブラハムの家庭教師をしていたことから、彼を伴ってイヴェルドンを訪れ、家庭教師兼学園の教師として1807年7月から1810年まで滞在した。13年にも再度訪れている。ペスタロッチーの最も信頼する教師の一人であり、学園の会計の監督も委ねられ、学園の経済的安定にも貢献した。アンナ夫人の親友。ミークの父親はペスタロッチーの崇拜者の一人であった。

10) ニーフ (F. J. N. Neef, 1770~1854)

ナポレオン軍に入隊後負傷、入院中ペスタロッチーの著作に触れ、彼の協力者となる。ブルクドルフ学園では体育と若干の初等科目を担当。1806年渡米。フィラデルフィア郊外に1809年ニーフの学校を創設。アメリカ最初のペスタロッチー主義教育の実践者。

11) ジュリアン (M. A. Jullien, 1775~1848)

フランスの陸軍軍人。1810年ラハルプ (ヘルヴェチア執政内閣の一員) の紹介でイヴェルドンの学園を訪れ、その理論と実践に感激し、『ペスタロッチーの教育法の本質、スイス・イヴェルドンの学園における理論と実践』(1812)を著してペスタロッチーの教授法と学園をフランスに紹介した。自分の3人の子ども達をイヴェルドンに入学させた。彼の勧めでフランスから多くの入学者がイヴェルドン学園にやってくるようになった。また彼は学園経営の助言者としても協力した。

12) ブロッコマン (K. J. Blochmann, 1786~1855)

イヴェルドン学園におけるドイツ人教師の一人。学園内でニーデラーとシュミットとの対立抗争が激化するなかにあっても、ペスタロッチーの下に留まり続けていた。しかし、1816年の初め、彼は意欲の強いシュミットのやり方に対して激昂し、15人のドイツ人教師達を引き連れて学園を去って行った。

13) ド・ラスペー (J. de Laspee, 1783~1825)

イスラエル人で、元来、左官の徒弟であった。スイスでペスタロッチーの事を聞き、自分は左官以外の職業に生まれついていないのではないかと考え、イヴェルドンに行った。ペスタロッチーは彼を靴磨きに採用した。ある日、ペスタロッチーは彼が教室の鍵穴に耳をつけているのを見つけた。そこでペスタロッチーは生徒達の中に入れた。ペスタロッチーの言によると、彼はペスタロッチーのメトードを最も忠実に応用した門弟の一人になった。彼はシュミットの教科書の賛美者であった。ナッサウの枢密顧問官。1809年にヴィースバーデンに学校を設立。その学校はゲーテの訪問を受けたこともあるという。ヴィースバーデンの学校設立後も定期的にイヴェルドンにペスタロッチーを訪ね、関わりを持ち続けた。ディースターヴェークに影響を与えた。

14) ホイシー (J. Heussi)

クランディの下級の数学とフランス語の教師。数と形についてのシュミットの本物を研究していた。4年後、1822年シュミットの推薦で1819年から22年までイヴェルドンで講師兼研修生であったメイヨー (C. Mayo, 1792~1846) がイギリスに設立した学校の教師となった。

15) アッカーマン (W. H. Ackermann, 1789~1848)

ザクセン地方の出身。1811年より1813年まで、また自由戦争に従軍してから1815年より1817年まで英国の子どもと共にイヴェルドンに教師として滞在した。後にはヴィースバーデンのド・ラスペーの学校の教師となり、1820年よりフランクフルト・アム・マインの模範学校の教師になった。

16) ボニファース (Boniface)

上記のフランス陸軍軍人ジュリアンが派遣したイヴェルドン学園のフランス語の教師。1815年2月牧師として着任。熱血漢で大きな期待をかけられたが、シュミットの特別な保護の下に

あったせいか、我侬、傲慢に陥り、学園の内紛渦中の人となり、1817年パリに帰った。後にペスタロッチー精神に基づく学校を設立した。

(2) 学園の主な訪問者やペスタロッチーの理解者

1) ヘルバルト (J. F. Herbart, 1776~1841)

ドイツ北西部のオルデンブルク生まれ。1794年イエナ大学に入学、フィヒテに直接師事し、哲学的影響を受けたが、やがて彼の知識学に対し思弁的懐疑に陥り、自己自身の哲学を追究するようになる。97年スイス(ベルン)のシュタイゲル家の家庭教師をし、3人の子ども達を指導した。1799年ブルクドルフのペスタロッチーを訪ね、その授業風景を直接観察し、感銘を受けたという。1800年シュタイゲル家を辞したヘルバルトは1802年ペスタロッチーの基礎陶冶の理念に関する著作を続けて発表した。

2) グルーナー (G. A. Gruner, 1778~1844)

フランクフルト・アム・マインの模範学校の校長。ペスタロッチーの教育法をドイツの学校に最初に導入した人。建築技師志望であったフレーベルを教職に導いた。大学で神学を修めた後、教師となり、ブルクドルフのペスタロッチーのもとに3カ月滞在。彼の教育方法に感激し、『ブルクドルフ便り』(Briefe aus Brugdorf ueber Pestalozzi, seine Methode und Anstalt, 1804)を出版、その教育法を広く推奨した。

3) フレーベル (F. W. A. Froebel, 1782~1852)

前述したグルーナーから模範学校の教師になることを勧められ、教師になってすぐ、1805年イヴェルドン学園を訪問した。また1808年9月から1810年8月までホルツハウゼン家の私教師として託された3人の子どもを伴って再度滞在した<sup>6)</sup>。

4) オーエン (R. Owen, 1771~1858)

イギリスのウェールズ、ニュータウンの金物・馬具商の家に生まれ、10歳の時ロンドンで年季奉公をはじめた。20歳の時当時産業革命の中心地であったマンチェスターで500人の工員を使用する紡績工場の管理をするまでに成功した。1800年、工場内に性格形成学院(5歳以上10歳までの子どもの初等学校)を創設した。16年には自分の工場で働く労働者の4歳以下の子ども達のための幼児学校を創設した。1818年、ヨーロッパ大陸を歴訪し、イヴェルドン学園も訪ねた。

5) リッター (K. Ritter, 1779~1859)

ドイツ近代地理学の創始者の一人。1807年、イヴェルドン学園と実践に深く感激し、その後、ペスタロッチーに傾倒した。彼の自然地理学は人類の生活及び歴史との相関関係で自然を把握しようとする人間主義的性格の強いものとなった。

6) シング (上記のグリーヴズに影響を与えた人)

二年間スペインに滞在した。イタリアを通過してスイスを旅行し、ペスタロッチーを訪問した。彼はペスタロッチーを敬愛し、ここに定住し、弟をイヴェルドンの学園で勉強させた。そしてペスタロッチーの教育方法を故国に広めたのである。

7) ナーブホルツ (P. J. Nabholz, 1782~1842)

ヴィリンゲン出身のカトリックの聖職者。1807年から1808年の冬の間イヴェルドンに滞在。ラテン語を教えた。14年、彼にペスタロッチーの学園の指導を委ねる計画は、彼がワートキルヒ(バーデン)赴任を命じられたために成功しなかった。しかし後にアールガウの師範学校長、1822年からバーデンのメールスブルクのカトリックの師範学校長を歴任、教育者として活躍した。

8) ラウツ (Lautz)

フィヒテの弟子で、ベルリンからザロモン、カリッシュ、イツヒを連れて来た。ラウツはペスタロッチャーの学校の基礎と目的と手段とを熟知することを自己の第一の使命と考えた。そのため教員会に出席した。この集会の主な発言者はニーデラーとシュミットであった。ラウツはペスタロッチャーの課題に対するニーデラーの思弁的な見解よりシュミットの現実的な見解に賛意を表した。

9) ラウマー (K. G. von Raumer, 1783~1865)

ドイツの鉱物学者、教育史家。1808年パリ留学中、フィヒテ、ペスタロッチャーの著書に接し、国民教育に心を傾け、イヴェルドンに赴き、学園の事業を研究、1810年帰国。後に私立学校の教職を経験し、貧民学校を創設。諸大学の鉱物学の教授を歴任する傍で、教育学史の講義を担当。

10) チュルク (W. C. von Tuerk, 1774~1846)

マイニンゲン出身の貴族。イエナ大学で法律学を学び、判事、首席顧問官、教育行政担当官等を経験。1804年6月ペスタロッチャーの実践を知り、学校経営を手がけるが、1808年5月には家族をともなってイヴェルドンに移住、協力者となった。しかし、1810年学園内の対立に際してシュミットやフレーベルと共にニーデラーと対立し、学園を去った。1833年にはポツダム市の視学となった。

11) ドゥ・ガン (R. de Guimps, 1802~1894)

1808年から1817年頃までイヴェルドンの学園の生徒であった。歴史研究に従事、1841年、イヴェルドン市民、市会議員となる。『ペスタロッチャー伝』の著者。父親はジャン・コッソン・ドゥ・ガン男爵。サンロンジェの森林監督官だったが、1792年革命を逃れてイヴェルドンに移住。ペスタロッチャーと親交を結んだ。妻カロリーヌは著述家で、1834年『リーन्हルトとゲルトルート』のフランス語訳(4巻)を刊行している。

12) ニコロヴィウス (G. H. L. Nicolovius, 1767~1839)

プロイセン教育改革期の宗務・文部行政官。ケーニヒスベルクに生まれ、同地の大学でカント、クラウスのもとで哲学、法学やがて神学を学ぶ。古代文化にも深い造詣をもった自由主義的で敬虔なキリスト教徒。1791年夏イタリア旅行の途次ノイホーフにペスタロッチャーを訪ねた。以後終生変わらぬ親交を深める。プロイセン文部当局内での最も良きペスタロッチャー理解者。プロイセンの文部省において最も早く(1808年8月)からペスタロッチャーのメトデー導入を提唱し、留学生派遣やツェラー (C. A. Zeller, 1774~1846) の招聘を実現した。

13) フィヒテ (J. G. Fichte, 1762~1814)

フィヒテは『リーन्हルトとゲルトルート』を読んで感激した。1794年春ペスタロッチャーをリヒテスヴィルに訪ね、数日間滞在した。ペスタロッチャーの教育法も含めてドイツ国家の再建を説いた『ドイツ国民に告ぐ』の講演は、イヴェルドン学園が始まって軌道に乗った頃である。また、フィヒテの夫人ラーン (J. Rahn) は詩人クロップシュトック (F. G. Klopstock, 1724~1803) の姪であり、ペスタロッチャーの妻アンナと親しい間柄であったという。

このように、上記の人々は国から派遣された者、ペスタロッチャーから請われて教師になった者、ペスタロッチャーの書物を読んで感動し、学園を訪問し教師になった者、友人からペスタロッチャーの話を聞いて訪れ、教師になった者、学園の教師に招聘された者、学園の生徒だった者が助手、教師になった等色々である。

「学園は1809年の終りには、6歳から16歳までの生徒数は150人であった。その上メトデーの原理と手段とを眼のあたり知り且つ教授をして見てメトデーを習おうとする青年や大人が平均40人くらい来ていた。だから城は教師の群を一緒に数えると200人以上の人々の宿となった。ただ授業にだけ出席

する多くの市内通学生はこの数にはっていない。』<sup>7)</sup>

学園に送り込まれた教師たちは、単にペスタロッチーのメトデーをマスターするばかりではなく、「ペスタロッチーの心に燃えている火で彼等自身を温める」目的もあったのである。実にペスタロッチーは「教室に長い間黒い雲のようにかかっていた屈辱的な訓練を廃止した。訓練は同情と理解に基礎づけられねばならない。必要な時には厳しく、しかしまた人間的で、寛大でなくてはならない。ペスタロッチーはそれを思慮的な愛 (thinking love) と呼んだ。何人かの参観者は実際に、半ば驚き、半ば喜んで報告した。彼の学校は学校でなく、家庭である。』<sup>8)</sup>

ペスタロッチーの下で学んだ生徒達は帰国し、諸々の学校の教師、さらには校長として活躍し、教育改革にも貢献することになった。

「プロシャの派遣生徒の大部分は三年間ペスタロッチーの許にあって忠実に且つ勤勉に自己の滞在期間を利用した後祖国に帰って来た。彼等は最初は諸々の学校や教員養成所の教師として、次には校長としてこの君主国の種々の地方に任命され、そして奮にペスタロッチーのメトデーの採用に依ってのみではなく、基礎的陶冶手段の新形成と多方面に互る改革とに依っても完全に立派に偉大な永遠な功績を残した。間もなく他の熱心な力強い国民学校の教師達はプロシャ君主国のあらゆる方面から彼等の祝福多き活動を助けた。即ちハルニッシュ、ディーステルウエーク、ロッセル、ツァーン、グラスマン及びその他多くの人々である。(後略)」<sup>9)</sup>

### 3 イヴェルドン時代の主な出来事

#### (1) 1808年の新年講演

この講演は他の新年講演と違って異例のものであった。講演に際して、髑髏と柩を前に置いたので、以降、柩前講演と呼ばれるようになった。学園に起こっている対立の影響で、学園に致命的な不幸をもたらすのではないかと苦悩しているペスタロッチーの気持ちが推察できる。自分の気持ちを精一杯表わし、自分の事業に協力してくれたことを感謝する思いと、死期が迫っているがまだ現に生きている自分のために今一層の団結、協力を呼びかけたのであろう。ここでも人を責めるのではなく、自己非難している。

講演の一部を引用しよう。

「私の生涯の事業に、私が予感もしなかったようなひびが生じてきました。私達皆を結びつける紐帯は、それが最も固く結び合わされていなければならない場合に、かえってゆるんできました。」<sup>10)</sup>

「私の幸運が終ったからといって、私の事業が減じるようなことはないでしょう。本物の金は焼けてなくなるようなことはありません。金は燃える災の中に入れられると、ただ精練されるだけのことです。たとえ哲学者が彼の世代の人々の全体と争うようなことがあるにせよ、真理と愛とは純粋なものである限りいつでも、人々の心をとらえるものです。」<sup>11)</sup>

「私は死ぬでしょう。けれども皆さんは生き残って下さい。どうか私の述べたことばが焰と燃えて、皆さんの脳裡にそのままに残りますように！」

友人の皆さん。私よりも立派な人間になって、神が皆さんを通じて神の事業を完成されるようにして下さい。」<sup>12)</sup>

#### (2) 学園査察

イヴェルドン学園の教育がヨーロッパ全土に注目されるようになった。特にプロイセンは留学生を派遣して祖国の再興を計ろうとした。そのことに着目したペスタロッチーは、スイスもそれに学ぶべきだと考えた。ナポレオン戦争以来の動乱による荒廃を教育によって救済し、国家を建て直すべきだ

という思いに至ったのである。それで学園の査察を政府に要請するため請願書を作成した。これに対し、学内ではニーデラーは賛意を表したが、シュミットは反対であった。結局、1809年6月政府に請願書を提出した。しかし、5日間を費やした査察の結果は期待に反するものであった。即ち、数学的教授においては優れた成果が得られているし、世間で言われている無宗教という非難は根拠がない。けれども学園が急速に膨張したことに伴って生じている若干の欠点を指摘し、メトーデの国家的規模の採用には消極的な判断を下したのである。もともと保守的な見解の委員達によって査察が行なわれたのであった。この結果はペスタロッチーの活動について革命的、無政府主義的として批判的であった保守派の勢力に好都合なものであった。

### (3) ロシア皇帝との謁見

1814年オーストリアとロシアの連合軍がスイスに進駐し、イヴェルドンが属するヴォー州に対し近隣の町の大きな建造物を野戦病院にすることを要請した。イヴェルドン城が最適であった。それで城の住人ペスタロッチーはバーゼルの連合軍司令部に二人の代表と一緒に訪れ、免除を嘆願した。司令部に到着したペスタロッチーはロシア皇帝アレキサンダー一世に謁見を許された。ペスタロッチーは民衆教育の重要性を説き、皇帝はペスタロッチーの熱意に好意を示した。それで彼の要望を受け入れることと、事業に出来る限りの援助をすることを約束した。そして聖ウラジミール第四級勲章を贈った。ペスタロッチーの熱意がイヴェルドン城を救ったのである。

### (4) 妻アンナの死

アンナは1815年12月11日死去した。1769年の結婚以来ペスタロッチーを精神的に支え続けてきた。アンナは慎み深く、高齢に至っても、気品に満ち、すべての人々の心のよりどころであったという。

学園の経営者として不向きであったペスタロッチーにかつてアンナは次のような手紙を送った。

「(前略)ただこれだけはお願いいたします。吟味してあなたの友達を見分けなさい。あなたは真実な友達を虚偽の友達だと思ったり、反対に虚偽の友達を真実な友達だと思ったりするかもしれません。いつも好ましい利害が何よりも先に支配するので、人々はペスタロッチーおとうさんにそれが自分の利害であると思込ませるでしょう。要するに私は心配なのです。あなたはまたもひどく混乱しています。そして老齢はあなたにも私にも速い歩みで進んでいます。私はどうしてよいか説明することもできません。ただ次のことだけは申し上げます。家政は一人にだけ及ぶではありません。それは広範囲に及びます。一人は勿論のこと二人にも三人にも。」<sup>13)</sup>

学内はアンナ夫人の死によって、再び同僚の対立が激化し、収拾できないようになった。

### (5) 『わが生涯の運命』の出版

本書は詳しくは『ブルクドルフならびにイヴェルドンにおける学校長としてのわが生涯の運命』(Meine Lebensschicksale als Vorsteher meiner Erziehungsinstitute in Burgdorf und Iferten)で1824年に執筆され、1826年に出版された。もともと『白鳥の歌』の一部となるはずであったが、コッタ書店は個人的な係争に関わる出版を拒否したため、ライプツィヒで出版された。目的はペスタロッチーが自分の生涯を振り返って、自分の事業が成果を生み出さなかった原因を追求したものである。内容は事業の歴史であり、学園の内部事情、職員の間人間関係、学園の分裂等であるが、客観的に記述されたとは言い難い部分もある。シュミットに対しては高い評価をしているが、ニーデラーに対しては非常にネガティブな評価をしている。1826年の春、シュミットは短時間ペスタロッチーを訪ね、出版のことを知らされ、ニーデラーと一緒にその出版を阻止するため、会合をもつよう提案した。しかしニーデラーは、会合に応じなかったのである。

『生涯の運命』のプロットホマンの感想を要約すると、次の通りである。

「ペスタロッターは『わが生涯の運命』の中で、多くの重要な真理を語っているが、二つの大きな幻影がある。一つは彼自身ならびにイヴェルドン学園の教育上の計画の価値と意義とに対する不公平な見方であり、他はシュミットを過大評価し、従順と忠実さの背後にある彼の本性を認めることをしなかったことだ。』<sup>14)</sup>

また、ジルバー (K. Silber, 1902~1979) の感想はブロッホマンと同じようなものであるが、ペスタロッターの自己非難に同情している面がある。

「この書が教師の争いの物語となり、また彼の当時の心理状態では、必ずしも公平とはなりえなかったのは、仕方のないことであった。ペスタロッターは、反抗心からであれ、あるいは世間に対して弁明しかつ彼の友人シュミットの名誉を守る必要からであれ、その書を自力で出版するという重大な誤りをおかした。本書は自分の畢生の事業が崩壊するさまをみつめる一老人の自己断罪である。それは自分自身を呵責する最も深い絶望の表現である。それがいたって深い感銘を与えるのは、自分自身のほかに誰ひとり咎めず、崩壊の責任を彼自身の事業の誤った方針以外の何物でもないとしているからである。夢想癖と軽率と見かけの幸運時の無思慮と管理的な無能力とを責める昔からの自己非難が過剰なまで繰り返される。しかしこのたびの表現はまったく誇張されているので、ペスタロッターは自分自身に対して弁護されねばならない。以前のすべての成果の過小評価と、彼のもっとも古くからの協力者たちに対する評価とは、シュミットの業績に対する賞賛と全く同じように、不公平である。』<sup>15)</sup>

前述したフィヒテの弟子ラウツが連れて来たカリッシュ (Kalisch) は党派の外に立っていた公平な傍観者であった。彼は1817年の夏にイヴェルドンを退去した。この時争いの波は最高潮であったようだ。ペスタロッターは敵の頑固さと容赦なさによって精神錯乱を来し、ユラ高原で療養した。カリッシュはここでペスタロッターと別れた。彼は次のように述べている。

「私はペスタロッターがその雑踏から暫らくユラの孤独へと身を引くに至るまでのこの出来事をペスタロッターの最も側近で目撃した証人である。(中略) 私はそれを読んだ時、この書の各ページからユラの高原で孤独な人がその当時別れて行く者と別れた折のあの苦痛に満ちた痛心の眼つきが光り出して来るように思った。—しかし問題は尚終わったのではない。否寧ろ問題はかたづいていっての方がいいかも知れない。というのは痛々しくも自己の難破の結果をふりかえった老人の痛心からは、勇氣に満ち希望に満ちて人生の営みに向かって行った別れ行く者の目からよりもっと多く行為への憧れと生の充実とのもつ火が輝いていたからである。—『そして彼がもっと為すべきことがあるなら彼はそれを棄てない。そうする外はないのである』と。彼の唇から思わず漏れた告白をこの書の行間に読み取ることの出来ない人は、彼がそれを書いている時、早くもノイホーフの新しい貧民学校への基礎が置かれていたことを知らねばならない。この建設は始められはしたが彼が永眠した時完成を見ずに残された。』<sup>16)</sup>

カリッシュの批評は、上記の二人と観点が異なり、うがったものである。ペスタロッターを真に理解しているように考える。かつてシュタンツの孤児院で5カ月間孤児の教育をしたペスタロッターは施設を野戦病院に使用するため明け渡さなければならなかった。この時も心身共に疲労困憊して静養したが、やがてまもなく新しい教育の仕事に情熱を燃やしたのである。

#### 4 イヴェルドン学園解散について

##### (1) 校長としての管理無能力

ペスタロッターは自己をどのように見ていたであろうか。人は皆善人であると信じ込んでいたのである。自分の性格について彼は次のように述べている。

「私は世の中の人はずべて、少なくとも私自身と同じように善良で、信頼できる人ばかりだと思っ

ていた。だから当然私は青年時代から、私を翻弄しようとするあらゆる人の犠牲になった。私は誰かある人の悪意を自分の眼で見るまでは、あるいはその悪意から実際に被害を被るまでは、その人に悪意があるなどと考えることは、私の性格としてできなかった。』<sup>17)</sup>

ところで、ペスタロッチャーの部下に対する態度で以下のような報告もある。

「ボニファースは良心的で練達した愛すべき教師として評判がよかったので、往々我が儘と傲慢とに陥った。1816年2月3日にも彼はプロホマンの感情を害するような遣り方でそういう態度を取ったのである。プロホマンは彼を「軽蔑すべき小僧っ子」と呼んだ。激昂し易いこの巴里子ボニファースは直ぐ様ペスタロッチャーを訪ねて苦情を訴えた。ペスタロッチャーは古い喧嘩は納まっているものと信じていたので、ひどく激昂してプロホマンを怒鳴りつけて、何時もこういう気持ちの時彼のやることではあるが、よく調べもしないでひどくプロホマンを殴りつけ、彼の弁解には耳もかさず、罵言は陳謝して引込めるように要求した。プロホマンはこれを拒絶した。そこでペスタロッチャーは即座に家を出るようプロホマンに命じたのである。』<sup>18)</sup>

よく調べもしないで一方のみを怒鳴りつけたり、殴りつけたりすることは教師のすることではない。プロホマンの方が年上であるのだから、ボニファースを嗜めるべきではないか。ペスタロッチャーはボニファースを特別に可愛がっていたので、公平に対応することが出来なかったのかもしれない。

ペスタロッチャーが校長としての才覚が無いことを同僚達は知っていた。したがって誰かが学園の秩序を立て直すことを期待していたのである。

「多くの教師達、例えばワイレンマン、ゲルディー、ラムザウアー、ロイツィンガー、プロホマン等は段々ひどくなって行く不規律に対して全力を尽くして戦った。けれども、彼らの同僚のうちには校長が秩序を立てることが出来ないのを利用して勝手なことをしたような者もいた。手綱を取ることはニーデラーが自己の責任とすべきであるとミックは考えた。しかしニーデラーは事柄を成るが俥に放任して置いた。』<sup>19)</sup>

ニーデラーは余計な仕事はしたくないという信念を持っていたのだろうか。学園を愛していたなら学内規律に真剣に取り組んで欲しかった。

また、同僚の中にはペスタロッチャーとニーデラーとの融和を図ろうとした良心的な教師もいたのである。以下には両派の間に平和を再現しようと努力した人の交渉の様子が記述されている。

シュニーダーはそれを目撃したのであるが、次のように述べている。

「ウィースバーデン出身のクラマー嬢（ベルクラート・クラマーの娘でド・ラスペーの生徒である）はイヴェルドンで女教師になり、後故郷の市で女学校を建てたが、彼女の心情の熱火と涙の力とでペスタロッチャーとニーデラーとの固い心を柔らげられると信じた。彼女は約一週間毎日幾回となくペスタロッチャーからニーデラーへ、ニーデラーからペスタロッチャーへと訪ね、耳に聒聒の出来るほど痛嘆し力説し哀訴して、正義の為に和解するよう二人に訴え、言葉の及ばぬ時は涙で補った。しかし努力はすべて無駄であった。岩のように強情なペスタロッチャーとニーデラーとの間に挟まれて優しいこの夫人はすんでのことに破滅するところであった。鳩などは二羽の鷺の戦いに手を出してはならなかったのだ。』<sup>20)</sup>

ペスタロッチャーは元来女性にはやさしく接したと推測されるのであるが、ここではそうではなく、またこれほど懸命に二人の仲を和らげようと試みたにも拘らず、クラマー嬢の言うことを頑として聞こうとしなかったのは意外である。

「ロシアから来たフォン・シュタツケルベルク男爵の場合は事情がこれと全く違っていた。この尊敬すべき人類の友はペスタロッチャーの方法をレーヴァルにある自分の領地に導き入れて、自分の百姓達を知力ある人間に育て上げる為にイフェルテン（イヴェルドン）で数箇月ペスタロッチャーの方法を学んだ。シュタツケルベルクもまた相争っている教育上勢力ある人達の中に平和を招来しようと力めた。その際彼の取った手段は感情の煙火とか涙の給水工場とかだけではなく、悟性的な明確な真理

であったので、その結果は極めて好く、1816年の終り頃にはペスタロッチーが奮起して、シュミットの奴隷たる地位から再びシュミットの主人になるであろうという根拠ある希望を殆んど人々に懐かせたくらいである。このよい希望は教師達の心を大きな喜びで満たした。』<sup>21)</sup>

ここで、シュニーターが「ペスタロッチーが奮起して、シュミットの奴隷たる地位からシュミットの主人になるであろうという根拠ある希望」といつていることに注目すると、シュミットは校長より権限を持っており、ペスタロッチーはシュミットを盲愛していたのではないかと推測できる。

校長としては、同僚の意見を聞く耳を持つべきであった。同僚が心配してペスタロッチーに助言したのに、全くそれを無視したということは、校長は頑固一徹の人で、校長としては失格と言うべきであろう。

## (2) 同僚の対立

### ニーデラーとシュミット

ニーデラーは哲学者で、思索的、理論的で、ペスタロッチーの基礎陶冶の理念を哲学的に体系づけようとし、実際の理念から外れた方向に導いていった。また、ペスタロッチーの事業が攻撃された時、よく防戦したが、辛辣な言葉を遣ったので、人々の感情を傷つけ、世間の信頼を失った。学園の教師達はこうしたニーデラーの野心に満ちた態度を喜ばなかったのである。

シュミットは数学者で、勤勉で、努力家で、実行家であった。数学のメトード化に大きな役割を果たしていた。経済的管理者として欠けていたペスタロッチーを援助し、学園に規律と秩序をもたらした。そのためにペスタロッチーから全幅の信頼を受け、盲愛された。その信頼や愛情を悪用し、ペスタロッチーを孤立させ、自分の勢力を拡大するようになった。ペスタロッチーの思想や事業の発展を計画するに当たって、我こそ最適の人物であるという誇りを持ち、傲慢な不遜な態度を取るようになった。

二人に共通するものは、ペスタロッチーを敬慕していたことと頑固で、野心家であることであった。

二人の対立は学園の内部に三つの潮流を作った。一つはニーデラーの一派、二つはシュミットの一派、三つはこうした対立を好まず、ペスタロッチーの気持ちを汲んで、誠実に仕事を進める人々であった。一番最後の人々は、一派、二派の人々から働きかけられ、苦境を強いられることになった。

ではいつからこの二人は対立したのか。1806年以来設けられた女子学園の管理運営に関することで、ペスタロッチーがニーデラーの仕事だけをシュミットの姿勢と比較して批判したことから生じたのである。しかし、1808年の暮、以前から相談相手にしていたロゼッテ・カストホーファーに女子学園を委ねることによって、この対立は一応解決した。しかし、秋になってペスタロッチーがシュミットの意見を容れ、ニーデラーに対して高い理念を追求するだけでなく、メトードの開発と子ども達の世話に力を注ぐよう勧告したことで、対立は一層激しくなった。

ではシュミットについての同僚の評価はどうであったか。

シュミットの味方であったホイシーでさえ次のように報告している。

「彼はひどく聡明な人ではあったが、愛情に欠けていて、鉄のような意志を持ち、寡欲ではあるが、ペスタロッチーよりもはるかに礼儀を無視した人であった。彼は外交的の手腕に富む才能を持っていた。学校の管理はすべて彼の手中にあった。彼は外国人や生徒の両親達の相談相手になったり、教師を任命したり免職したりした。彼こそ校内のあらゆる出来事に対する最後の法廷であった。』<sup>22)</sup>

## (3) 生徒の父母の要求

「(前略) フレーベルが久しい間家庭教師として助けていた上流階級と交わっている有力なフォン・ホルツハウゼン夫人は彼等の子ども達をペスタロッチーの許に送ることを両親に思い留まらせた。単に彼の生徒は知識の取得が少ないだけでなく、彼等が「決して善い風習は学ばず、徒らに卑しい

礼儀作法を学んだ] というのである。彼女はその子ども達をイヴェルドンに置き自分も其処にいたので、彼女の言葉は自己の観察と経験とに発しているというのである。』<sup>23)</sup>

こういう親たちもいたということを見無視すべきではなかろう。また次のような報告もある。

「(前略) 授業は訪問者によって毎日のように邪魔された。やがて親たちはこの学校を求めてやって来て、それが与え得る以外のことを要求した。それぞれの親が我が子のために自分の地方の状態と風習とに適した教育を望み、ペスタロッチーは屢々心弱くもこの要求を承諾したのであった。というのは、彼はそうすることが遠方の地方に自分の方法を宣伝する方法と見てとったからである。やがてイヴェルドンの研究組織を侵害した混乱の原因の一つは、疑いもなくここにあったのである。』<sup>24)</sup>

親の言う自分の地方の状態と風習に適した教育とは何を意味しているのであろうか。たとえば地方にゆかりのある特定の教科目等を開設して欲しいということであらうか。また、ペスタロッチーはここで承諾するのではなく、自分の教育の信念を諄々と説くべきであった。

#### (4) 社会的事情

日本と違ってヨーロッパは陸続きなので、周囲の国から攻撃される恐れは充分あった。ペスタロッチーの時代もフランス軍に攻撃されて、親や家を失った子ども達が大勢いた。またロシアでナポレオンが敗北すると、イヴェルドン学園のドイツの生徒達は圧制者からの解放を知り、祖国のために参戦しようと帰郷した。生徒ばかりでなく、教師の中にもいた。ペスタロッチーはこれを是認したのであった。

このような社会的状況の中で、ウィーン会議や神聖同盟のことも述べる必要がある。

ウィーン会議は1814年9月から翌年6月までウィーンで開催された国際会議である。これはナポレオンのエルバ流刑の後、イギリス・フランス・ロシア・プロイセン・オーストリア等によってフランス革命戦争やナポレオン戦争後のヨーロッパ国際秩序の再建のために開催されたものである。会議は1792年の政治状態への復帰を目指したのだが、領土配分問題等でしばしば難航した。そして神聖同盟(Holy Alliance)は1815年、ウィーン会議の後、ロシア皇帝アレクサンドル一世の主唱により、ロシアおよびプロイセン(フリードリヒ・ウィルヘルム三世)・オーストリア(フランツ一世)の三国君主が、同年9月26日パリで結んだ同盟で、その綱領はキリスト教の正義と愛の精神を持って相互に兄弟のごとく親睦援助し合い、国民に対しては家父長のような慈愛をもって臨むことにより、和平を維持することを宣言した。この同盟は後にはヨーロッパ協調における反動的な反自由主義政策のスローガンに利用された。

したがって自由主義の思想が抑圧される傾向にあったのである。ペスタロッチーの学園での教育も敬遠されるむきがなかったわけではない。

## 5 晩年のペスタロッチー

### (1) 『ビーバーの書』

本書は『ハインリッヒ・ペスタロッチー伝論考』(E. Biber: Beitrag zur Biographie Heinrich Pestalozzi, St. Gallen 1827)で、ニーデラーがエドゥアルト・ビーバーという人物の名をかりて、ペスタロッチーの『生涯の運命』に応えるために編集させた。内容はペスタロッチーの性格、宗教、教育論を楯にとってペスタロッチーを攻撃したものである。この書の句の中にニーデラーが怒った時に吐く機智が認められたという。

この書をペスタロッチーは1827年2月の第2週に受け取った。彼は大変に興奮し、昼夜にわたって家の中や家の周囲をさまよい、久しくペンを執ることもなかったのに、ペンを執って書き始めた。

この書についての人々の感想を挙げることにする。

ビーバーの書についての批判を求められたナーブホルツ(シュミットの断固たる敵であった)は「(前略) ビーバーはその際ディアナの神殿を汚して、それで自分を不滅にした積りでいるように見える。(中略) 光からは暗が生ずる筈はありません。暗は外から来ます。ペスタロッチーは彼を暗くした周囲の人々を打ち破ることがもう出来なかつただけのことです。彼の光が却って瘴気を生じたということが彼の責任でありましょうか。」<sup>25)</sup>と書いている。

また、シュテルンは「(前略) ペスタロッチーの最後の書(生涯の運命)は彼には相応しからぬ哀歌であった。しかしビーバーのような乱暴狼藉は却って私を激昂させた。ペスタロッチーはあれでも何かを与えている。ところがビーバーの方になると単に人を下へ引き下げるだけだ。(中略) 熱心にして愛情深く、崇高にして行動的であったペスタロッチーは人間の歴史のうちに火のような消すことの出来ない文字で認められて立っているのである。(後略)」<sup>26)</sup>と書いている。

ペスタロッチーのメトーデの論敵であったシュタインミュラー(J. R. Steinmueller, 1773~1835)さえ、この書に注意を払わなかったという。

また、ハイデルベルクの教会役員シュワルツ(Schwarz)は既に『生涯の運命』を読んでしたが、『ビーバーの書』により心を痛めて次のように書いている。

「その教育の理念を以って凡そ人間の一代の間全ヨーロッパを支配したこの著名な人がここに自分の罪を告白しているのである。この意気消沈せる人類の友は自分自身を不当に判断している。彼の苦痛の哀訴のうちには尚人間への愛がある。世人への辛辣さは少しもない。」<sup>27)</sup>

また、ジルバーもビーバー(ニーデラー)を鋭く批判している。

「反対者による最も卑劣な動機の転嫁であると同時に、自分達の道義的な優越性の強調であり、ペスタロッチーの性格に見られる本質的な傾向の意地悪い解釈である。—これらはすべてこの上ない厚顔無恥の侮辱なのである。ペスタロッチーの友人たちが『生涯の運命』の刊行を残念に思っていたとすれば、[このビーバーのふらちな所業]は彼等をなおさらひどく憤慨させた。シュミットは決して多くの同情を得てはいなかったが、今ではニーデラーもすべての好意を取り逃がしてしまっていた。」<sup>28)</sup>

『ビーバーの書』は『生涯の運命』に対する報復であろうが、高齢である恩人とも言えるペスタロッチーをこれほどまで侮辱するとは尋常な人間とは言えない。出版にするのではなく、自己反省し、穏やかに自分の気持ちを表現することが出来なかったのであろうか。

ペスタロッチーはこの恥ずべき中傷に論駁することを望んだが、ペンをインクに浸すことも忘れて乾いたまま書き続けた。そして数日後亡くなったのである。『ビーバーの書』の衝撃は、ペスタロッチーを死に至らしめたのである。

## (2) ペスタロッチーの遺言

遺言は1827年2月15日、亡くなる二日前に書かれたものである。以下に要約する。

「ヨーゼフ・シュミットは私のついていた地位につき、私の子ども達の父親になるだろうし、またならなくてはならない。シュミットは私と学園とのために大いに尽くしてくれ、そのために限らない苦しみを嘗めてきた。私からは食物と着物以外は何も受け取らなかった。私は彼の負債者だ。私は彼のために喜んで生命すら与えたい。彼は私と私の学園との救済者だ。正しい秩序と聡明な儉約とによって、また手許にある資源手段を最大限に、しかもいつも正しく利用することによって、彼は私の学園の負債を支弁しようとし、また私の意図と希望とに添って、新しく一つの貧民施設を創立し基礎づけようとした。

ビーバーの書物は私に心理学的な性格描写の仕事を課し、回答文の執筆を強いた。私は自から筆を取ってこの仕事にかかり、そしてそのために倒れた。ニーデラーとクリュージーとネーフ。彼らはビー

バーを否定しているけども、ビーバーを自分たちの前衛に利用し、彼の手助けをかりて、平和の愛好者という名声を得ようとしている。ところが彼らは私の一生の最後の幾年かを不愉快なものにしたすべての事件の責任者である。君達の告訴を裁判にもち出し給え。私の学園を管轄する有能な裁判所でシュミットと私とに責任があると君達が言うすべてのことを、厳しく審理し吟味してもらい給え。私の遺品のなかに、私は彼に、彼が彼と私との名誉のために必要と認める書類を自由に用いる権限を与えよう。しかし私の灰が私の敵達の限りない情欲を鎮め、私の最後の呼びかけに動かされて、彼らが正当な行為に、しかも人間にふさわしい落ち着きと品位と礼儀とをもって出てくることを望みたい。いずれにせよ、私は君達を許そう。私は私の友人達を祝福し、彼らが故人（ペスタロッチャー 訳者注）の愛を思い、彼の生涯の目的を彼の死後も最善の力を尽くして押し進めてくれることを希望する。』<sup>29)</sup>

ペスタロッチャーは最後までシュミットを愛し信頼していたのである。学校管理無能力のペスタロッチャーに代わって少しでも秩序をもたらしたばかりか経済的な手腕も発揮し、同僚から嫌われながらも学校の財政に寄与したのだから、彼を守るためにこのような遺言を書いたのであろう。

## おわりに

メトーデのメッカと呼ばれたペスタロッチャーの学園イヴェルドンが崩壊したのは、大変残念なことであった。ペスタロッチャーは学校を経営し、また部下を統率する校長としての手腕もなかったのである。ペスタロッチャーも人間であり、人に対して好き嫌いはあったのである。ニーデラーが基礎陶冶を彼流に解釈し、ペスタロッチャーの意味するものからかけ離れてしまったことはペスタロッチャーにとっては許し難いことであっただろう。

『シュタンツだより』の中に登場するのであるが、ペスタロッチャーには可愛い子どもがいた。その子どもはペスタロッチャー先生に愛されていることをいいことにして他の生徒を威嚇したのであった。この時のペスタロッチャーの対応は省略するが、教師たるものは公平に生徒に対応しなければいけないと考える。

また、ペスタロッチャーにはミークが一番信頼できる部下であったようだ。学園の無秩序等をミークに相談したかったのであるが、ミークは仕事があり離れていたため、断ってしまった。ミークは後悔している。また、ナープホルツもペスタロッチャーから信頼され、学園の指導をして欲しいと哀願されたのである。しかし彼も教区の仕事で受け入れることができなかった。

ペスタロッチャーはどんな苦境にあっても直ぐに立ち直って次の教育の仕事に専念した人であったのだから、高齢でなかったら、『ビーバーの書』は彼を傷つけても大事には至らなかったであろう。

頑固で一徹なところはあったが、それでもペスタロッチャーを愛し信頼した人は大勢いたのである。学園の沢山の教師、訪問者、生徒が世界各国に散らばって行き、ペスタロッチャーのメトーデばかりでなく、人間教育を実践したのだから、彼の精神は永久に生きていっても過言ではない。イヴェルドンの教師から、他の学校の教師への推薦も喜んで引き受けたペスタロッチャー、また靴磨きとして採用したド・ラスペーが教室の鍵穴に耳をつけて熱心に授業を聞いていたのを教室に入れ、彼の才能を伸ばし、立派な教師にしたペスタロッチャーはやはり深い愛情の持ち主であったと考えるのである。

## 【註】

- 1) 福田博子著「人間ペスタロッチャーについての一考察」『秋草学園短期大学紀要』13号 1996年
- 2) イヴェルドン (Yverdon) はフランス語読み、イフェルテン (Ifelten) はドイツ語読みである。
- 3) 著名なベルンの神学者。1781年から96年までベルン大学の神学教授。その後ゾーゼレンに牧師として赴いた。99年にはベルンに戻り、首席牧師、ベルン教育局長などを務めた。日本ペスタロッチャー・フレーベル学

## 人間ペスタロッチーについての考察Ⅱ

- 会編『ペスタロッチー・フレーベル事典』玉川大学 増補改訂版2006年 12ページ
- 4) ドゥ・ガン著 新堀通也訳『ペスタロッチ伝』学芸図書 K.K. 1963年 327～328ページ
  - 5) ハインリヒ・モルフ著 長田 新訳『ペスタロッチー傳』第5巻 岩波書店 1941年『ペスタロッチー・フレーベル事典』を参照した。氏名や生没年不詳なものもある。
  - 6) 「当時教育及び教授の合言葉は、ペスタロッチーだった。この合言葉が間もなく私の合言葉として私にもまた明瞭になった。何故かというにグルナーだけではなくて、この学校の二番目の教師も嘗てペスタロッチーの生徒だった（後略）このペスタロッチーという名前は実にまるで呼吸の如く且つまたたとえ証明することは出来ないにしても、確かにはっきりと、少なくとも鼓舞するように私の発達と自己教育とに影響を及ぼし、電気でも通じたように益々私を感激させた。この時私は少年時代の初めに父の家で或る新聞から次のような記事を読んだことのあるのを思い出した。——瑞西にはペスタロッチーという名前の40歳ばかりの全く世を離れて生活している人があって、今も自分自身でまた自分の努力で読み方書き方及び数え方を学んで、という風に私はそれを理解していた。」フレーベル著 長田 新訳『フレーベル自伝』岩波書店 1974年 74～75ページ
  - 7) 『ペスタロッチー傳』第4巻 1940年 訳者附録 6ページ
  - 8) A. E. Meyer: The Development of Education in the 20th Century 丸善 1961年 P. 15 P. 13
  - 9) 『ペスタロッチー傳』第5巻 19ページ
  - 10) J. H. Pestalozzi: Am Neujahrstage 1808, Pestalozzi Saemtliche Werke. Kritische Ausgabe begruendet von A. Buchenau, E. Spranger, H. Stettbacher, Zuerich 1964 Bd. 21, S. 3
  - 11) ibid. S. 5
  - 12) ibid. S. 8
  - 13) H. Morf: Zur Biographie Pestalozzi's, Winterthur. Druck und Verlag von Bleuler-Hausheer & Cie. 1885 Dritter Theil S. 310
  - 14) 『ペスタロッチー傳』第5巻 395～396ページ
  - 15) K. Silber: Pestalozzi, Heidelberg 1957 238f.
  - 16) 『ペスタロッチー傳』第5巻 393～395ページ これはペスタロッチー誕生100年祭の講演の内容である。
  - 17) J. H. Pestalozzi: Pestalozzi's Schwanengesang, PSW Zuerich 1976 Bd. 28, S. 213
  - 18) 『ペスタロッチー傳』第5巻 253～254ページ
  - 19) 同書 86ページ
  - 20) 同書 385ページ
  - 21) ibid.
  - 22) 同書 475ページ
  - 23) 同書 145ページ
  - 24) ドゥ・ガン著『ペスタロッチ伝』320ページ
  - 25) 『ペスタロッチー傳』第5巻 408～409ページ
  - 26) 同書 409ページ
  - 27) 同書 397ページ
  - 28) K. Silber: Pestalozzi S. 239
  - 29) ペスタロッチー著 長田 新訳「書簡集」『ペスタロッチー全集』第7巻 平凡社 1960年 574～577ページ

### 参考文献

- 1 ペスタロッチー著・佐藤正夫訳「新年講演」『ペスタロッチー全集』第10巻 平凡社 1962年
- 2 ペスタロッチー著・大槻正一訳「わが生涯の運命」『ペスタロッチー全集』第12巻 平凡社 1959年
- 3 村井 実『ペスタロッチーとその時代』玉川大学 1986年
- 4 ケーテ・ジルバー著・前原 寿訳『ペスタロッチー』岩波書店 1981年
- 5 J. H. Pestalozzi: Meine Lebensschicksale, PSWKA Zuerich 1976 Bd. 27.
- 6 K. Silber: Pestalozzi, London 1960
- 7 H. Morf: Zur Biographie Pestalozzi's, Winterthur. Druck und Verlag von Geschwister Ziegler, Fuenfter Theil (玉川大学出版復刻版) 1889
- 8 C. Widmer: Pestalozzi's Burgdorfer Zeit, Berner Heimatbuecher 1973
- 9 木下康彦・木村靖二・吉田 寅編『改訂版 詳説 世界史研究』山川出版 2009年 第2刷
- 10 京大西洋史辞典編纂会編『新編 西洋史辞典』改訂増補 東京創元社 2000年 第5刷

(受理日：2011年2月25日)

